

○道江砂恵子、荒川由希、竹内愛子、前田亜紀子、山崎和彦、飯塚幸子  
(実践女子大学)

《目的》演者らは前回の第 50 回大会にて、失禁ショーツの物性及び温熱特性について報告した。今回は滴下量を変化させた場合の生理心理的特性を中心に検討した。

《方法》本研究は実験 1 と実験 2 に大別される。実験 1 では健康な女子学生 8 名を被験者とした。人工気候室を用い、環境条件を 27 °C RH75 %一定に制御した。試料は前回の実験結果に基づいて選定した 2 種に、新たに紙製パットを加えた計 3 種とした。滴下量は 5 ml 及び 15ml の 2 条件とした。測定項目はショーツ内の温湿度、皮膚温、主観申告であった。被験者は椅座位安静を保持した状態で 37 °C の温水を滴下された。その後 15 分間の安静を保ち、さらに 10 分間の足踏み作業を行った。実験 2 では女子 3 名を用い、漏れについて検討を行った。試料は前回と同様の 8 種とした。立位にて 15ml の温水を注入しながら椅子に座らせ、5 分間安静を保持させた後、ショーツ外表面の漏れ面積を計測した。

《結果》実験 1 において、皮膚温は安静中では、濡れによる影響はわずかであったが、作業開始に伴い著しく低下した。相対湿度はいずれの試料においても滴下直後より上昇し、作業に伴い低下した。滴下量が増加すると試料間の差は拡大した。なお相対湿度は紙パットが最も低い水準を示した。実験 2 では 1 種の試料を除いて漏れが観察された。これの対策として、特にショーツ脇部に対する配慮、あるいは素材及び構造面の検討が重要であることが示唆された。